嚴島八景

下

ヘ 1
1300
3

金澤文庫
早稲田大學圖書

門 へ 1
號 1300
卷 〜3

八景集俳諧發句序

八景ハいにしへの大宮人の詠さき
うし雲客の勝景をえらむ詩歌をもつて
歟　神恵我等くらあ猿へハ神仙もいやゆし
山さらへハ古哉の落葉を拾つる人も恐ろしく
和哥をあつめ詩を集納し侍る其歌ハ世に
手向を神にたてく其道筋をたてゝ去るらん人の
言種なり前光明院大僧正信杌ともにの詠め俳諧
一巻ハ下官にもえて嬌俑をなし山ちかくうつく照らし

抑これに　神恵を添へ侍るもさまてらに比叡の山
ちかみわたりを連歌なれハこもれ業を形つくりへ湖
海の風人すら告るふ此詠めくみ子好み遊侍らん事
ともならい名急帆にすゝ情をも詠つゝ其ごと東小
乃辛津國ハ使を無き世とも形く枝紅人ちかく
なきハともら侍る我世を形し抑詩所其能の
各目前後詠りて以入れも物を感し一情精
またる事ハ和漢古今合一也といふ詠れを前に
い詠掛を後に詠く先侍る人を御批從ハ其宗匠の流と

うや存言僅語も其實とをて　神ハ感通し給ふ
べし豈巧言令色の數寄者ともや此浦行脚の
先達思ひ立とて此一帖の撰を浄書せしめ諸方之秀能
此四種三冊一部とす　巖嶋八景の叢詠
四字ハ風早三位江君清涼亭ことやうを
給り侍る形利

元文四年仲秋

淺生菴野坡叙述

巖嶋八景集誹諧發句

巖嶋明燈

明けぬやまてより立はしめの燈　淺生

大元櫻花

此奥ハ不浄婦も花や山かくら　、

滝宮水螢

水ニ輝く神や旅もつ蘇るかまる　、

天の真の出来色へ川ほたる　豐後　馬貞

鏡池秋月

名月や老もしらぬかゝみ池　浅生

谷原麋鹿

艸ゝの名や鉾波海も安き高道　馬貞

御笠濱鋪雪

一寸思ふ雪の果なし御笠濱　浅生

有浦客船

春色の比舟のゆるし有あうる　浅生

彌山神鴉

秋のゆふ物絶ミ濱ふ鴉乃峯移　馬貞

嚴嶌明燈

嚴嶌連中

百八のまんとうや波のはなし綱　汲全

四廓に涼る夜也花そそぎ　胡洞

百八乃流燈昇しそれ海　訒沙

乃輝や海に映りなる汀　伴古

明燈やなかく浮に涼し星月秋　碓月

乃燈に涼風涼し宮出り　成政

浪常さ沢宮丸流燈の　似久

乃燈や遠る夕涼し地金砂子　墨之

明燈や二両里ほど道有香取る　二助

様と堂宮の四廓涼し浪丸燈　路芦

乃燈や柱の台風見薫る　凡歩

乃燈や華やかみり夜の海　如之

乃燈ほど万灯日をのまし夜の海　文朝

明燈ほど波に数咲夏浮し　李窓

乃燈や浪乃本社の一世々し　李中

大元櫻花

大元や桜ちり流る小貝取　諷砂

注連縄や雪ハ流るゝの神箔　碮月

手かゝせたる木桜や神の森　成政

大元や宮河ハとぬまとく桜橋　二助

年ゝ桃馬銭李子にて匂ん流さる　胡洞

大元や流るゝ市の並へ餅　路芦

大元や一本く見ん流るゝ橋　凡歩

おほとや桜くと宿法華も椿　李窓

夕おるゝ眼の幣やゝ神さくる　李中

大元や柳の蝶まんむうほり　文朝

大元やかりにまつる酒初穂　麻直

裸身をさらすやみだれて桜道　以全

おほとかや神のかこひの桜がき　似夕

大かたや花よまつりゆさ鬼瓦　如之

大元屋碇ふりさけの頭ヶ笠　墨之

おほりかやに帆すませり碇さかす　伴古

瀧宮水螢

本のまゝや滝乃宮居裏明り　瓦歩

涼しさや螢見ちらく古社　文朝

はやせ蔭や滝走ん水玉に帰蛍　成政

手にうくる瀧の光や清ま砂　諷砭

滝の宮よ螢見ん舞木下闇　以全

ほそる糸や汲ぬく光る滝の音　胡洞

滝毎に流れては飛蛍かな　李中

滝煙浪せまる岩のほとりかな　磋月

滝の宮露を光ありて飛蛍　麻直

ゐ紀の丈やいく紫おし飛蛍　如之

杉むらや滝黒蛍や宮の朱　二助

滝乃玉寧ふつゞや水ぬほとる　李窓

蛍さうはて宮の守灯は蛍の影　墨之

白糸の絹くる滝思ひ蛍哉　似夕

瑞籬や蛍散る滝の音　路芦

鏡池秋月

手清めし影もいま池の月　磋月

水さびし蘆も錦や秋の月　墨之

月涼や口茶ハ色て澄る鏡　胡洞

青氏茶の浮出月やこの廣池　如之

池黒く名の紫白とはるや月の松　二助

月添や浪行とまりし池の秋　路芦

池の草月や鏡の曇となり　似夕

夕露や水うねこゐ浪池の月　汰全

三日月出て立る星やも鏡池　文朝

月涼や池も鏡の曇そち　李中

雲も残や池は鏡の白月夜　諷沙

流行浮る月の行ゑや池の秋り　氏歩

池水の月や鏡乃拭あて　麻直

谷原糜鹿

秋夜深枝の声き分しハ谷の鹿　李中

流きしの孔滝こほ花や谷隠し　似夕

谷の原己か声迷ふ鹿世年　成政

霊隠や谷に風さる麋の角　胡洞

道芝の人斗かや谷思ふ鹿　路芦

鹿の尾に秋も暮ぞりハ谷の水　二助

露落や麋の毛に振るハ谷曇り　以全

沢芹れ西をぬ辛そや麋の声　氏歩

谷河に麋や角研きて滑り　礁月

麋啼や夕日残さぬる谷の原　諷沙

谷風や鹿に川麋の合色声　麻直

萩露志形へに花や宇ふの麋　文朝

洩し川ーハ谷や麋の谷に入　墨之

花の野子のみる日掃や谷埋　如之

八十

御笠濱鋪雪

明の炬や雪の御笠乃きさ光り　二助

雪の濱暮多城照し多るの色　似夕

見る人へ金は雪の肉なり御笠濱　以全

御笠濱海士の待くるる雪もなし　伴古

満汐の巫ゆそや雪の八重疊　路芦

積雪や風も角なき御笠濱　胡洞

蹈ものや水の雪漕く御笠濱　諷沙

帶ま敷る御笠の雪や風なれ　凡歩

積雪魚弥ま文形し御笠濱　李中

雪降ハ縮むる羽との汎磯崔　如之

玉垣ハ雪の仕切り御笠濱　李窓

拾合山や比笠の雪に名残あり　成政

ほど雪や浪のさゝれは笠浜　礎月

雲晴日和の風の木葉乃千鳥哉　文朝

有浦客船

入舟や浪中なりし礒を咄し　似夕

乗出して舟に涼むやみとの浦　胡洞

七種や有の浦乃舟拍子　李中

舟を曳す揚やいろ葉のみとの浦　路芦

浦霧に寐す乃舟泛ぶ小春哉　汰全

私りし焼敷に木葉や有の浦　麻直

帆下ハ下女に月見るやみとの浦　諷汰

有風や舟思ふ節なりも小春哉　如之

秋深し舟子いさ舟や有の浦　文朝

一 黒柳子舟も蒔や有の浦　碪月

まのやら結び舟玄の子乃餘籌　二助

二位乃海思首や可く好子る　佯古

浦涼し永一勝思舟ちる　成政

縫舟の字く丸る子鳥哉　李窓

六月や國舟渦とふ市女笠　凡歩

岩季以や飛く洲くたの浦　墨之

彌山神鴉

卯長乃や当日鶏黒峯移り　胡洞

神鶏鋪たとい清し櫻の實　以全

其垢餅子濃え居や船り共　二助

松清し分る鶏や二たつ羽　似夕

又鳥や雛の羽流しる岩清し　碪月

神の井や車も果子ゆるかも　如之

巣成ぬとく遊ふや神の祖精　成政

いさ霧一本流しや神り次　文朝

柏常れ方とぬきそや呼鳥　路芦

木の実流む嵐も二川や神精　麻直

白萩金翠精すむ流ゆきり　李中

素菊や二川精れ枝護星　瓦歩

風ふする暦藪の明りや宮精　諷泳

明燈

雨気の中らぬ鴻や言し日和　藝州廣嶋 東雄

流灯や表にまくも瀬の尺　壺天

流挑や出洋きらり又月閑　風律

流挑の絶えさらり西家の秋　仙呂

名月や波の和歌浦礒照り　梅北

明月や寿ほと小浪の琴の糸　梅丈

漁灯りし涼し見すしき月夜　芦江

初汐や秋蛙乃まに[illegible]人　青雨

名月や汐まち寄る去の波　亭ゝ

明月や朧にほらし波君上　文五

明月よ浦乃森と見えやはさかり　文枝

名月や星月なし[illegible]海　吟素

名月や岸おる芦葉の風の節　蛙町

明月や霧の幕きし秋の袖　壮支

月の下庭の月や浪乃照　棠梅

明月や雲し[illegible]る桐の[illegible]　五州

清[illegible]や[illegible]化粧内侍達　葎主

友庵へ宵森をいて[illegible]見　瀬戸田　藤九

大元

波に散る昼のうかれや桜貝　壺天

乃宴の壽迎る朝や言はされて　葎圭

大ともや海へ親き汐干されて　仙呂

お浜も出や拾むも見るも汐狩　風律

さくら咲浜に幅ある社宮中宮　吟素

足の手に浅そふや孫宮桜遊　梅北

山や浜さくらにあそく汐干見　六梅

汐干浮奥きさくらも神の蔭　青雨

幣手振る磯の薫りさくら哉　梅丈

桜見や赤湯の味もに斗子の宿　蛙町

宮守も杣気手振君さくら寿　宜由

家くらき桜かな照や浜明り　呂舟

瀧宮

滝波にこほれかゝる螢哉　風律

神垣は瀧のあらしやちる螢　東雄

瀧節や螢は浮てすゝみ道　呂舟

旅の汗拭くて瀧の螢かな　梢風

吾孫宮の螢はひそや瀧の音　不一

沖追ひのもるんの連り帆舟　瀬戸田 藤九

鏡池

池の汐月に移るや留り魚　仙呂

かれもとり覗くや池の細月秋　梅北

漣や雲うつ露く池の月　青雨

菊をぬらして白きや月の池の隈　東雄

名月や冬まで氷る池の底　風律

池の月照るや下葉の裏表　冬羽

月浮ふや池子や出てう棲り鐘　壺天

谷原

流れ来や流ときれても汲まて泉　青雨

原に寒く簾や弱日にうしろ向　壺天

立簾の模様うつるや萩落　風律

市附ハ麓も総簾や谷ヶ原　東雄

角結ぶ石寄る簾や谷ヶ原　牡丈

若竹や咽まで延びし艸の丈　文五

若風や若菜のまとふ風呂屋　六梅

若風に身をまかせたる鹿の毛　宜由

御笠濱

去波の高さに重や濱の雪　壺天

磯の香を添ふ河もとる涼し郎　青雨

汐先千鳥のさ鵆や濱れゆき　松明

赤雲のちらしくと高れ濱り子　呂舟

和浪の海千鳥や雪千鳥濱　冬羽

舟曳ん菜中れ志賀のからや浦の雪　瀬戸田　藤九

有浦

墨に横手舟の涼しや日本の宮　梅北

浦舟や寐く暑さは寐入　東雄

舩せりのやむや二手に月涼し　壺天

蝶のまも添ふてや浦の帆かけ舟　青雨

おりで追涼しれ舟や浦の宿　宜由

市も了舟乃杜女や独涼衣　六梅

舩乃やや扇の空も見舟涼陸　仙呂

團涼もの舟に鐵かや夕涼し　吟素

実答ち舟の足場や涼あり　文枝

舩くや人さいかく行て朧あり　栄梅

類舩はまねく岸根も柳かな　艸巴

浦涼や泊りの舟も夏座敷　風律

神鴉

はなれしも船よりも舟の霞かな　陽水

はなれの二尾ふ舟や夕を稼雲　風律

若木や足にて縫る神のは　呂舟

あつまりて山祢ゑつきね神楽部　青雨

置の言葉から香稀碑しおしる　雪航

筆に零るれハ鳥青かな　梅北

年納一句を吟し八重ね神前にかへ侍る

たくひなきみとりや波のいつくしま　江山

明燈

魚の眼にしする灯の影涼し　藝州廿日市 切偲

涼風や波花焼の二里明り　素梅

明燈や山も立テとし五月雨　木端

明絶の影やこれ程て明ける

小方 柯中

大元

大ともや元気を揃ふ沖の魚

汶上

釣舟も出さるゝ丸陰や汲たるみ

犂子

日うけりに櫻の上手や初櫻

切偲

涼風や櫻を渡ふ大鳥居

小方 素淙

大元や沖を見すへなさの海

梅栖

大元のさゝ浪見へ玉藻

藝州大滝 耴礫

瀧宮

手拭て裳も濡や滝せん宮

汶上

鏡池

絃かるゝや松ゆゝし月見のみ池　素梅

曇なりし晴分の絵見月と池　素涂

たまに月を盗まりける池　柯中

月更し池や鏡も照し　距礫

谷原

老鹿の麻若ぬあゆや谷原　露國

谷の京鹿の寐の比や草莚　木端

宮陰行く鹿尾林し谷の京　切偲

谷陰や頭と伸も荒の物ふれ　汶上

御笠濱

都よりはなしのやかや内は遠　葛丈

足行日雲の跡ハなし御笠濱　木端

雪丸日や白張ちらし姫御笠濱　素梅

有浦

入舟や秋風文は付て有の浦　汶上

帆てらし陸ハ蝉の道場やその浦　切偲

新茶を写ふ艀やゆられつゝ　羽足

入舩をかざし扇やありの陸　木端

常ハ秋隣ハ香もなき有乳浦　素泉

神輿

ゑらうぬ裏の世帯や神輿くれ　羽足

佐鴨あふりや涼しき精進箸　葛丈

暫くれるを楼ハ涼し神輿　千永

峯おし嵐吉家にゆや神輿　梅栖

明燈

光猪川ふきれ沈施や朧月　備後三原 夕舟

陰陽月や佐渡の海の色　霞友

明燈や泥足ましれ蜆とり　芦笛

明神や冬木にあとみ流の數　倚松

四竹やみそりしてよ涼し舟　尾道 梢凮

四ツ堂金蔓の花盛に夏つ津　三原 丈羽

大元

津の国に地のうえやや宮さくら　流凮

雛壺子れ出ら小娘乱し桜狩　藍水

桜より七浦に寄る小舟哉　汉水

大山木の木寄の橋々や花盛　竹呂

大和ても隣も含る桜哉　不至

滝宮

淋黒家営三十日や落化粧　霞友

日ハ八ツ思営附申り淋の向堂　倚松

まいくと宮り明し宮掛り　凬歩

鏡池

湯っ色の寒る植や秋乃池　倚松

月影や一葉もちりし鏡池　以水

月も池てりし此手かし花二柱　凬歩

月ハ宴毋秋の眼やかゞみ池　尾道 規道

三日月思後向かせうつみ池　夕舟

谷原

野鹿は角一もとや宮木立　藍水

捨られし森は鹿や市の営　以水

足弱しいては見るや森の春　夕舟

袖に見し尾上落しや森乃笹　竹呂

若き木は本に曲るや花曇り　倚松

稲妻や花曇雨の毛理河つゞき　流巴

御笠濱

足とめし濱の汐干や雲れ雲　太羽

雲も帆ぞ一筋ぞや雪の濱　倚松

七戸雪やむ杖の跡これ花の標　友之

一かまみ〻の秋も浦曇雪　風歩

夕なきや汐も跡なく濱の雪　李径

有浦

舟あそひ露汲京やか夜衣　少舟

蚊帳ぬ〻ぬ稀とこ濱広し汐の舟　藍水

入舟や山ほとゝきす丸裸　芦笛

桃賀被凉しゝもやひぬね　倚去

有浦の漁る名手や柁の舟　丈羽

神鵆

浜鵆や波に起てふ娘と川星　霞友

珍らしき拍子に飛や宮烏　以水

物毎にしをらしき葉の神鶏　夕舟

法加りしや南へ飛鐘の声　鳳歩

浦清く見し月も来添し神鶏　友之

明燈

照る夜は汐焼の浅みかな　備後福山 素浅

明にし飛や沖佃ゆる網　達士

涼しき人出て親も何となく埋ける　市嵐

明ぬや汐待舟き廓下　晩汀

明灯や傘乃さしまて冬の星　歌隣

其の虫来如明鯉や海七里　雨同

大元

奈良山や桜よ忌む人もなし　　青々

大りとも花の婦とりや神楽　　冬扇

麻る散る宮の夜明や神桜　　素浅

滝宮

水黒と張西流乞以蛍かな　　雨窗

なりゐしやれ得も蛍の羽乃継　　青々

鏡池

汐ふかり静な月や池の汀や　芦鴻

町を離て月おち河まで鏡池　沙鷗

月よ研く鏡や池の名をかり　兎山

梟息忍池のここちや月ひとり　青々

谷原

清き森の背たかゝや森乃雨　沙鷗

ゆるうゝや気清くねし森のむし　青々

入違は立や尾上あれ女夫鹿　冬扇

清をしの乃角よいかさるや草の紀　雨商

あさ元とし森をも来れ美の森流くらは　泉風

渓水の鳴り続ふや森ありあり　夜琴

餌ニ肥し鷹の巣寐や冬籠　素浅

御笠濵

浦思ふ雪より積て汐やけ舟ヶ舩　達士

稍思ひ淵も延ぬ石飛し浦の雪　芦鴻

初雪や孫左の寐顔の浦詠め　冬扇

満潮や雪れ日ニ思ふ月の余り　市嵐

手よお使ミ雪の形こしや御笠濵　規道

雪舗や雪れ雛候寐様の濵ミれ　福山　宜應

引汐や雪思ひ追行砂ゆかう人　沙鴎

有浦

舩和や欠座をし舟と舩　市嵐

舟と傘帆子ほし奇浮れ　雨司

玉浦乃舟も礼日や菜の花香　達士

何りの浦志らぬ舟や夜座き　泉風

往来や呼え舟まださくり岸　芦鴻

舩客の流りて料理や浦の秋　扇之

涼しさや浦波七重も加り舩　其旁

市わ坊舟ろ少日や桑奇　冬扇

神鴉

飛りし雲のし羽さし羽や雲の峯　素浅

神鴉やさ川引と羽や山さくし　扇之

神鴉かされ子羊や雨屋より　晩汀

夕立や抱恩香散て神りけり　宜應

は移屋に月ある露かな　沙鷗

明燈

一夜新は燈も叶へほゝされ　筑前博多 赤雷

神の灯や森の涼しき蟹の泡　同福岡 杏雨

は燈し未やおぼれの雛生　万李

の燈や波に散浮あるゝ葉　筑前赤間 都外

は灯月のくる若葉やいつし海　計圭

の燈に風鬼らほりや泊り舟　素元

数の燈や水郷も列して嚴島　澤翠

明燈乃写りまいるや飛子島　井楓

灯火に走かく涼し藻の花　同杷木 浦之

燈し錨のいとちや舟丸魚　同芦屋 素蝶

蛍もみな梅の香やいつくしま　同直方　可文

蛍きえさゆる霜夜や厳し汐　仝黒崎　為蔵

手際や三ツ子いふあし其扱　筑後善導寺　木而

眉涼し蛍見し作さ汐の屋　善導寺　雪刀

志賀るゝや蛍すみをと舟　而后

春もし数の蛍の汐揺り　仝瓦瀬　為雅

山頭や蛍厳さぬ波の上　市山

果をもて浜蛍明し月の上　筑後久留米　秋虎

漁火明く蛍の常ゝ波涼し　仝　魯用

明蛍や汐に流るゝ帯の花　豊後日田　野紅

蛍灯や蚊思ひ渡る瀬の音　仝　倫婦

明蛍の流れりや霜思ひ涼さ　仝玖珠　古桂

蛍も明る一雨や港へ漕　長州赤間関　蓬雨

山里も蛍の夜や萩思ひ明　翠門

此程や光りの中におかし清月

萩と成ん露もすこし古燈籠

石見濱田 梨明

諸燈や花の九重いはらし海

肥後熊本 乙明

此燈籠昼ハ俺思白椿

備中玉嶋 満志

此燈や神の縁を楽朗詠

文州

仝鴨方 可璟

大元

菓子賣の宮くゞる迄桜かな

杏雨

おほりとおもひ錦一日や神さくら

博多 嵐爾

額宮や猿思いさみも去桜

皃牧

波も花もきえる居の花や神桜

まん

茶の碗まで祢宜のまゝ手中まで神桜

福岡 兆虎

太元や浦くまて見ゆる靴掃除　何木

太らかや桜にかゝし桑の杖　全子

鶴ハおさく波の際まで初桜　只芦

桜見や藻屑もつせ石の間　梅鳳

夕和波や舩幕涼る宮さくら　梅和

桜もり君御幸や社道　兎角

若午附や桜書けし神子の袴　全只連 秋里

浦くまに咲も表ハ涼し沖くもり　宇変

太元や浦くまに轉る鶴の聲　福岡 計圭

八重に澤沸や桜のあと一重　筑前杷木 播路

浦しほそ先太元乃さくら哉　風芦

波櫻旅の連衆ハ桜の船　渚叟

浦風や咲て切せて神さくら　浦之

新風も嵐来がの浦くま計　為敲

杖に見ても玉垣白し神さくら　筑後塩足 市山

灘越すや鳴ハ日和乃[illegible]桜
綱弾穂を絡る勢や初さくら
いつの世の人袂の見ゆや花桜
大えや薺とけ切初さくら
一めくり鳴の雉ほと桜かな
初さくらりふ東く出る芝の精
流れ浮鳴ぬ宿や初さくら

筑後久留米 茅呂
杜夕
豊後日田 倫婦
仝杵築 江芦
古桂
肥後熊本 素朝
乙明

袂せきて何をはなりて松桜
露の子を祢ぼれぬ花桜哉

滿志
長崎 路圭

滝宮

滝まへや蛍の借も常涼し　筑前博多 鳧牧

放し捨る袖の蛍や滝戻り　杏雨

葉屑ハ蛍従や滝流し　兆虎

水玉を砕ける蛍の滝の宮　計圭

鮮飾る滝見堂や祢宜の床　福岡 只芦

光しめけ身の滝や飛蛍　者乙

悉雲も光る地濡る飛ほたる　誘甫

滝涼し此岸の胡座の蛍待　兎株

水玉乃黄に飛滝れ蛍哉　仝杷木 池水

蛍見の寺社は消や滝見宮　仝吉木 舎乙

呈流せ水の篠りやとぶ蛍　木而

引待つる蛍のせきや滝の列　為雅

下沽まふ水を離るゝ蛍の飛　秋虎

天津星蛍さわぐや滝の宮　倫婦

滝越えて雫も入らぬ蛍かな　豊後玖珠　利錐

水間打ちかゝる雫より出る蛍かな　仝少年　鯉木

若竹の渡りに滝ぬ蛍かな　仝杵築　故扇

滝殿に翔て渡りし蛍かな　素朝

宮の名や滝をもちりのおもり蛍　長門赤間関　州用

蛍かな山吹比東ぬささの宮　可璟

ちる水東ぬ掲や蛍れ滝の文　備中鴨方　直遊

切ぬさ本蛍手おろやさ紀の宮　杉助

蛍かんや滝手控柄の流も整　仝中嶋　和交

我雁ゝ樹手あつ川渡ぬ蛍かな　仝倉敷　李吹

鏡池

なまれ水の澄と言うや池の月　嵐雨

渋茶や月見ぶまするうみ池　筑前博多 ちよん

名月や神とるもいさむ鏡池　計圭

朝月も一筋しや池の底　弄水

餅の名も投ふ川もなの月　交和

孔干入月ゆふ力や渡見照　秋里

清月のいつくらや待流の西　全素嶺男 池里

月照りや水見混なき鏡池　都外

旅法師や月清池の丸に之れ　杏雨

月見秋猿も寄るとうき池　福岡 何木

河見月利や月に池の環　帝山

さるの雲に見く手向と月乃池　雪刀

秋添く汲むや池乃月見味　善導寺 而后

昔から月を映けり加茂池　木而

猿猴や池の月取れ猿猴　筑後久留米 知李

亀割る亀の尾ながし秋の月　肥後熊本 三雅

萍に渚をさけつ秋の月　毛雨

撰り捨し月と波の月よ池　梅楚

手出池に語るる月の照　長州赤間関 里畦

此浦の玉もしらぬ見度鏡池の月　備中鴨方 杉助

月移ふ山や互に移さる鏡池　和友

池の月と寄や神子の鏡鍋　可璟

水思皺伸や鏡乃月の照　李吹

谷原

鹿原や枝舟着る揺(ヨコ子)堀　杏雨

乳ますゝる鹿子露けし谷の原　未雷

萬つゝや足も清して鹿の声　嵐雨

鹿鳴や住来清しめる草の原　浮艸

と啼や秋常来る鹿も鳴ぬし　福岡 知柳

蔦鳴や角清し上て清風の原　野靏

舟守の風も余所事や荻の鹿　者乙

鹿鳴や虚戸やる役も谷の原　和匊

蔦守りまで淡く布子着や鴫鴫い　山歩

杣の飯升や鹿の谷の原　芝芳

叢又入や鹿の子風さそ海士の列　五雷

餌ひろふ子をとる鹿や谷の原　澤翠

飛鹿や小石をもみ爪力　池里

谷の原声高横向鹿の群　猪路

松も竹う清しの露や鹿の声　今久喜宮 里因

子出立月ハそよろくと雁の声　猪踏男十一才 温吉

稲妻に飛ひ行雁やいそかしく　今長洲老人 友舩

萩の音につれて流るや一葉桐　素蝶

秋空乃啼出けりや雁の声　素元

漁火を渡く雁や岡野の子　筑前怡土 紗葉

行違ふ鹿に満し月の萩の末　今黒崎 凡猪

雁の声沼辺に立や芦ヶ原　雪刀

徒ならぬ雁に交れる子芸哉　木而

雁鳴や障子に七日乃雁(カリ)木殿　杜夕

落葉吹雁来紅の郷や雁の声　市山

妻恋の鹿子鳴や夜の傘　知季

鳴鹿も角落するまでとの草　魯用

角みつく萩や岡野の松の汝　野紅

雁は乳の一夜過し雁の声　故扇

挑灯に消へく帰る雁の声　三雅

雁の声や尚旅空立て棟の雨　肥後熊本　梅楚

雲の巣乃宮を抜るる鹿の声　毛雨

笑ふりし見る一ツ佛や女鹿鹿　程々

恋ゆゑや小舟に寝て遠く鹿　琪滴

も食は鳥寐や鳥の声もやし　十雨

しぐれや里に見えおれ夜衣　岱下

雁鳴や錦の染たる程りけり　長州赤間関　薄遊

一霜も履にも軽し鹿の聲　百櫻

角依ても風に消ゆくや鹿の声　里畦

松風や雁の音清ふる声の原　直遊

雁の音に暖みし鹿門かな　備中鴨方　正房

[illegible]　和友

加須も蓋一切やしらぬ　季吹

雁鳴や窓に筆染し声かな　長崎　野頂

麻花の菫まじりや苔の下　路圭

御笠濱

浪塚は佐濱は澤見え船の雪　嵐雨

咲川や雪に和鳴る濱鹿　見牧

白妙の二重の雪や御笠濱　福岡 池水

浪よせて来るや佐笠の雪の里　知柳

雪晴れの沖一面や佐笠濱　雨庭

浪越える磯本も雪や佐笠濱　舎乙

足跡も追ふ雪や佐笠濱　吉木 潛子

波風に流し浮くや雪の濱　里因

浪寄せは雪吹かれや佐笠濱　時賞

濱形り戯合ふ雪や月の庭　木而

濱先におろし戸や雪の宿　善導寺　亀毛

年来ぬ掃世居もなし濱の雪　茅呂

雪の日やかくる島先て波の音　梅楚

まさりぬのみ梅は濱の雪　素朝

宮嫁る枝手二ッや濱の雪　肥後熊本　琪漪

しらのや濱ハ浦島の雪かくれ　毛雨

汐やしる海士のたく縄雪の濱　三雅

足抜や鳥の裏毛も雪の濱　星畦

雪や月鳥居と神かたき目鏡　杉助

松嶋の行方ハ捩しき海かくし雪　備中玉嶌　文州

有浦

幕張て舟もて待る月も名なれ　筑前福岡 一万李

福よさん梅咲去年や其の浦　杏雨

船よ宿てはれ柳や有の浦　未雷

月涼し舟は百里の市のあれ　皃牧

舟呼や乗り鶴来門 哉　都外

旅なれや酒買船乃自か碑　福岡 青宇

紅葉舟や雪れ間室生の浦　まん

追風の弥生の眺や船の雛　我及

不系舟乃河をはなれ有の浦　全子

端舟ハ躍出るや鯨よろう　交和

初汐や磯の遠ふ湖う船　蘭陵

有浦や旋も添る冬の雲　鷺岡

あらゝし踊師百番や漕る舟　市杉

時雨て伽羅を焚やてよ船　遊木

湖り帆や内待乃文思扇照　浦之

百船に七夕船や出挑灯　猪路

爰にも舟はすゝみや有の浦　筑前杷木 風芦

女中舟うちはをならしや有の浦　舎乙

みゆ乃や一揖くれて有の浦　句文

船の出入秋舟に鳴や五月暗　筑前赤間 里舟

舟ーつ鳴出産出亀や有の浦　風猪

汐曇帆やかけの道有舟　筑後善導寺 餘羽

宵の雨や浦まで来て舟詰　市山

色り帆や勝てる有の浦　雪刀

早舟や松や桜うち渡し舟灘　木而

名浦や神楽出立の市の舟　野紅

うらはや汐干舟の通ひ櫓　豊後玖珠 一嵐

梅さくや下は雪搭く舟の旅　今村築 野労

百舟を垣穂に漕くさかん哉　利錐

月絶の梯にかゝるや 舩行帰　三雅

舩形や濤とゝる舟の声　肥後熊本 十雨

下るや帆や川を遠山の浦隆を　琪滴

年の標里には舟や舩屏風　肥後熊本 程ゝ

帆柱の木の間の月や五の浦　長州赤間関 芳里

ちる舟に涼しや青櫓　里畦

沖舟のなかれて咲ありする春の雨　赤間関 伯風

舟梶もとゝらて涼し汐さかる　石州濱田 梨明

舩主は袖を背浦にさされ　備中 湍志

いさとよそ帆をもふ浦の　杉助

五浦や涼しさみ流ふ舩待れ　直遊

神鴉

代継もみかうの花さや神烏　可文
筆ひとり雪晴ちやかゝ鴉　素蝶
七浦乃武てりにゆや神りまき　遊木
手にあるい霞の餅や神鴉　杏雨
山守かきさる初日や神からす　筑前福岡 誘甫
出出しきた晴ぬ浩山の鴉かな　緑紫
風立る翼や月見ゆ神鴉　梅和

枝若葉三年鴉や神の山　浮州
麦秋し森なきし杜に神鴉　万李
神のまみ二年鴉や羽のいさゝ　桃里
梅咲や古巣淋しき峯烏　里舟
夕暮や合点顔なる鴉二羽　木而
宮烏出や中川りし冬木立　雪刀
山寂りて嵐に鴉や神の留主　秋虎

茅吏元来てれ枝折や外鴨　古桂

胞や子稚たさじ青楽　岳　三雅

冬梅や凡るさもおくれ夕烏　梅楚

二稀實も交悪ん神の秋ならん　伯風

雪とらぬ峯や葉内の神かるし　齋関　薄遊

赤稀や麓了露む院の棟　蓬雨

子に譲る時や若柴実神稀　芳里

神の洞ゆや霞ん在かしきと　直遊

涼しく浮連雲につれ行二羽稀　満志

涼しさや光るる倉の峯丸森　路圭

明燈

乃燈や佐保姫かゝる玉の帯　浪花 梅従

高燈や闇り流込波のしらさ　真之

明燈や碇しる乃汐の蔵　洛下 変生

乃燈や雲より星飛し春の夕　浪花 兎足

東の虹四郎照て浪添し　吟枝

波清き風もなやむや池の月　桂舟

立燈や銀河の落る海の面　嵐梅

高燈や波よりてほる梅の花　晉月

大元

日頭も桜かなりや月分量　洛下　風之

氣のまゝむ花の夕日や詩乙女　浪花　左流

桜咲のんて梅ま六郎りな　梅従

滝宮

宮立を郷ふ風の螢ミ那　浪花　三惟

朧節や螢追ひ寄る草ゐ風　冬之秀

滝姫も織や常錦緯の糸　誉月

手に刈つく團扇内外の螢哉　梅従

鏡池

月澄や氷を流さハ言乙訖　梅従

鏡池藻ヲ咲蝶や月の恩　浪花 真之

新さヽし桂男乃仮鈸　晉月

月旅く池を轄まろ忌垢離　風之

谷原

嗅艸もゆしけや鹿の声こなり　洛下 蛙中

とゐしや思もおふや廉のあら　嵐梅

旅人の足を伝くや兼お祥　洛下 百芽

けふ敬拝の法立ほうへ法楽にも綺る

鹿の子に神お使や雲墨　風之

草刈の廉ゑ訓さる宮森計　左流

兼啼や枝本住ひの谷橋り　冬秀

揉もゝの汐溜にや康の花　梅従

蓮柳や横日掛しきりれ原　三惟

御笠濱

雪嶋猿ハ海も一本て大名居　梅従

季とる世也此笠の濱や六の紀　吟枝

濱田の雪う稀生出来なり一日南　冬秀

奈良ハ月家より此笠の雪滑　浪花 貞沖

看浦

沖の御散るやみ見れ浦子芸　嵐梅

鄭船のお板も涼しきの浦　浪華 三惟

春雨や新茶くらべる催合舟　梅従
領巾振や袖子叙来有の浦　貞沖
稲妻やはまち寄り再雨帯　〃蛙中

神鴉

七浦や汐くゝるを出る鴉哉　真之

むさしや霧り新橋る群鴉　嵐梅
若柳たわゝり眠る鴉かな　梅従
五鴉やあ乱(ヘラ)の大鳥の名残り　風之

嚴島行脚年々不同

松乃雪海も彩るや嚴島　洛下 重瀬
嚴島と出くゝそ紅葉や宮　難波 諷竹
御汐そふる居の根かる和布刈かな　洛下 我黒

顔に結ぶ浦に嫁しくそ郭公　浪花　天垂

来ぬ月や磯に吹るゝ角凡江　惟然

廻廊に秋の風やさし嚴島　涼菟

燈籠やいはるゝ山泊の花　支考

稍子れる國や若菜の嵐哉　露川

晝と寝る扉と月見の近藤　淺生

元文四年仲秋

撰者

淺生庵野坡門人

嚴嶋連泉

渡邊胡洞

高木凡歩

西原諷沙

八景集終

嚴嶌靈場　美景瞻望
金聲歌曲　玉振詩囊
教余摹寫　恭敬神光
脩揮禿筆　實恐誠惶

洛下龜田窮楽書

嚴嶋松羊舎蔵板

[illegible]

[illegible]